

「唐音」外来語の意味の変容—「外郎」からの考察

耿 蘭

指導教員 高橋 強

創価大学 文学研究科 高橋ゼミナール

要約：本稿では中国語と日本語の中で、書き方が同じでありながら、意味などが違う言葉に注目する。そのような問題意識に立って、まず一つの手掛かりとして「外郎」をとりあげる。第一歩は言葉の本来の意味、すなわち中国でどのような使われ方をしていたのかを概観する。その上で、日本人や日本社会でどのような使われ方に变化していったのかを明らかにする。その際、そのような使い方を可能にした背景も考える。

キーワード：唐音，外郎

はじめに

「唐音」とは、宋、元、明代に帰化した僧侶、あるいは明、清代の商人が博多、堺、長崎に伝えた中国の漢字の音のことである。唐音は当初、禅寺において使用されていたが、江戸時代になると禅寺ばかりでなく、一般の日常生活においても使われるようになった。江戸時代に起きた「唐話」ブームにより更に普及したと考えられる。明治時代になって発表された「外来語源考」(大槻文彦『学芸志林』第14巻1884年)の中には多くの「唐音」の外来語が収録されている。

そこで生じた疑問の一つは、「呉音」「漢音」は外来語として扱われないのに、なぜ「唐音」だけがそのような扱いをされるのであろうか、ということである。もう一つは、「唐音」外来語として収録された語の中で、饅頭、蒲団、杜撰、卓袱、外郎、払子、羊羹等、本来の意味と大きく異なった使われ方をしている言葉が目立つのはなぜなのだろう、ということである。さらに、この二つの疑問の間にはなにか関係があるのであろうか、という点である。

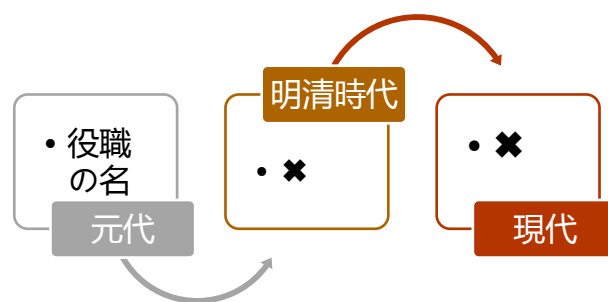
本稿では以上のような問題意識に立って、まず一つの手掛かりとして「外郎」をとりあげる。まず本来の意味、すなわち中国でどのような使われ方をしていたのかを概観する。その上で、日本人や日本社会でどのような使われ方に变化していったのかを明らかにする。その際、そのような使い

方を可能にした背景も考える。それは意味の変容に大きく影響してくるからである。

1. 中国における外郎の変遷

本来外郎は中国の役職の名前で、宋と元以来は役所の文書担当職を指す。

しかし、明清時代を経て、封建社会の終結に伴い、「外郎」という役職がなくなったのである。現代では外郎は使われなくなり、現在ではすでに死語のような状態で、辞書調べないとこの言葉の存在すら知らない状態になっている。



2. 日本における外郎の変遷

現在日本での外郎はお菓子として有名であるが、その歴史を遡ってみると、実に興味深いことが発見できる。

2.1 役職から家族の名へ

中国の陳延佑という人が元の終結とともに、日本に亡命した。元々彼は「礼部員外郎」の官職を持ち、その官職の一部「外郎」をとって姓として

自称し始めた。このことによって、外郎は初めて役職から家族の名前になったのである。

2.2 薬の名

陳延佑は医術に詳しく、「透頂香」という薬を生産しはじめた。そして、その店舗は場所がよく、往来した大名から民衆まで、その薬を常備薬また帰国のお土産として買った。それゆえ、「透頂香」は名物として全国的に有名になり、薬の名前は「外郎」と呼ばれるようになったのである。

2.3 歌舞伎の名

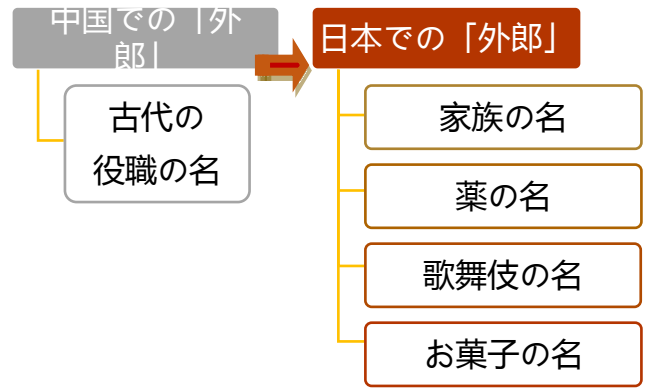
享保の頃、歌舞伎俳優二代目市川団十郎は痰と咳の病気に苦しんでおり、舞台に立ってもうまく話せなかったので役者を諦めかけていた。しかし、偶々外郎のことを聞き、服用してみると病気が治った。感心したため、舞台で外郎の効能を述べるという恩返しをしたいと申し出た。最初、外郎家は宣伝になるので堅く断ったが、団十郎に世間の人に知らせることは人助けになるからと言われ、最終的に上演を認めた。歌舞伎十八番「外郎」ができたのはこのような経緯からである。

2.4 お菓子の名

また、外郎家二代目の宗奇が外国信使接待に自らお菓子を作って供した。それはたちまち評判になり、薬の外郎と対照し、「外郎氏の菓子」から「お菓子の外郎」になったのである。このように、外郎は最終的にお菓子の名前になったのである。



お菓子の外郎



まとめ

以上をまとめると、外郎という言葉が中国では、昔の役職の名前から現在の死語になっている。それに対し、日本での変遷は時間の流れとともに、外郎家の活動により新たに四つの意味を生み出した。それぞれ家族の名前、薬の名前、歌舞伎の名前、お菓子の名前である。

外郎の変遷を通して、言葉の意味は人間の社会的活動によって、随時的に変わっていることが分かる。外郎家の初代である陳延佑が日本に来てからこそ、すべてのことが可能となっている。現代人として、我々のどんな小さな行動であっても後世には影響していることを心から感じていた。

今後の課題

「外郎」のようにほかの唐話は多数あり、これらの唐話は中国と日本人々の社会活動によって、また別の変遷状況があるかもしれない。これからはほかの唐話の言葉の変遷も調べていきたいと思っている。

参考文献

呂叔湘、丁声樹 (2016) 『現代漢語辞典』 商務印書館

岡田袈裟男 (2006) 『江戸異言語接触—蘭語・唐話と近代日本語』 第1章第3節 pp. 34-46 笠間書院

神奈川最古の商家、薬とお菓子の「ういろう」家とは? <https://allabout.co.jp/gm/gc/457497/>
外郎藤右衛門 『外郎家及びういろうの概歴』
神奈川県小田原本町1-13-17のパフレット